

注

- ① 辻村（1992）を基に編集した高梨（2002）『とはずがたり語彙表』『使用度数順語彙表』から算出。
- ② 34の「思ひの絆」は底本（現在のところ孤本である宮内庁書陵部蔵本）では、仮名で「おもひのほだし」とある。
- ③ 赤塚（1983）に「もの思ひ」の意味内容について詳述してある。
- ④ ジャパンナレッジ収録の『新編日本古典文学全集』において、全文検索を行ったが、「思ひ腹」は検出されなかった。

【参考辞書】

大野晋編（2011）『古典基礎語辞典』角川学芸出版
 中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編（1982）『角川古語大辞典』角川書店
 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第2版（2001）小学館
 室町時代語辞典編修委員会（1985）『時代別国語大辞典』室町時代編1 三省堂

【参考文献】

赤塚雅巳（1983）「『もの思ひ』小考——中古文学に於ける——」『青山語文』13
 入江さやか（2013）『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法『同志社国文学』第78号
 入江さやか（2014）『とはずがたり』における「申す」の意味・用法『同志社国文学』第81号
 入江さやか（2015）『とはずがたり』における「聞こゆ」の意味・用法——「言ふ」「聞こゆ」「申す」「奏す」——『同志社日本語研究』18
 菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳（1995）『土佐日記・蜻蛉日記 新編日本古典文学全集13』小学館
 久保田淳校注・訳（1999）『建礼門院右京大夫集・とはずがたり 新編日本古典文学全集47』小学館
 次田香澄（1987）『とはずがたり（上）（下）全訳注』講談社学術文庫
 高木和子（2005）「古代語の『身』について——「身にあまる思ひ」考——」『人文論究』54(4)
 高梨信博（2002）『とはずがたり語彙表』早稲田大学文学部高梨信博研究室
 辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引』【本文篇】笠間索引叢刊98 笠間書院
 辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引』【自立語篇】笠間索引叢刊99 笠間書院
 福田秀一校注（1978）『とはずがたり』新潮日本古典集成 新潮社
 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉（2014）『日本古典対照分類語彙表』笠間書院

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金による2010～12年度基盤研究(C)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者 石井久雄, 研究課題番号 JSPS 22520478), 及び, 2013～2015年度基盤研究(C)「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者石井久雄, 研究課題番号 JSPS 25370531) の成果の一部である。

るきこともなくてやありけむ、いかなる返りごとにか、かくあめりき。

兼忠女▽ おきそふる露に夜な夜なぬれこしは思ひのなかにかわく袖かは
などあめりしほどに、ましてはかなうなりはてにしを、(下281-04)

- (5) 暗う家に帰りて、うち寝たるほどに、門いちはやくたく。胸うちつぶれて覚め
たれば、思ひのほかに、さなりけり。心の鬼は、もし、ここ近きところに障りあり
て、帰されてにやあらむと思ふに、人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひ明か
しけれ。つとめて、すこし日たけて帰る。さて、五六日ばかりあり。(下291-5)
これまでの結果を〈表3〉にまとめる。

〈表3〉『とはずがたり』と『蜻蛉日記』における「思ひ」の意味・用法

	『とはずがたり』			『蜻蛉日記』		
	地の文	和歌	計	地の文	和歌	計
①心配	10	2	12			
②恋	8	2	10		5	5
③気持ち	6		6			
④予想	4		4	1	2	3
⑤願い	3		3	1	1	2
⑥執着	3		3			
⑦服喪	2		2			
合計	36	4	40	2	8	10

4. おわりに

本稿では、『とはずがたり』と『蜻蛉日記』における「思ひ」の意味・用法について、分類、記述をし、その意味・用法ごとに用例を挙げた。『とはずがたり』に、意味・用法の種類が多いことがわかる。

『蜻蛉日記』においては、動詞「思ふ」は特徴語として挙げられるほど、使用例が多いが、「思ひ」の用例は10例と少なく、そのうち8例が和歌に用いられ、さらにその和歌のうちの5例が、恋の用法で、「思ひ」の「ひ」に「火」が掛けられている。『とはずがたり』においては、「思ひ」が和歌に使用されるのは、40例中4例のみで、「思ひ」に「火」が掛けられている例は1例しかなかった。

本稿では、動詞「思ふ」の意味・用法について触れられなかった。「思ひ余る」「思ひ立つ」「思ひ寄る」などの複合動詞との関連も調査しなければならない。今後の課題である。

ては気色悪しければ、倒るるに立ち山と立ち帰る時もあり。近き隣に心ばへ知れる人、出づるにあはせて、かくいへり。

隣人▽ 藻塩やく煙の空に立ちぬるはふすべやしつるくゆる思ひに (上105-9)

(44)(45) さて、かれよりかくぞある。

兼家▽ 折りそめし ときの紅葉の さだめなく うつろふ色は さのみこそ
あふあきごとに つねならめ 嘆きのしたの この葉には いとど言ひ
おく 初霜に 深き色にや なりにけむ 思ふ思ひの 絶えもせず い
つしかまつの みどりごを ゆきては見むと するがな る田子の浦波
立ち寄れど (上118-9)

(中略) 浦の浜木綿 いくかさね 隔て果てつる 唐衣 涙の川に そ
ほつとも 思ひし出では 薫物の このめばかりは 乾きなむ(上119-8)

(46) さらにいかにもいかにもあらねば、かうしつ死にもこそすれ、にはかにては、おほしきことも言はれぬものにこそあなれ、かくて果てなば、いと口惜しかるべし、あるほどにだにあらば、思ひあらむにしたがひても語らひつべきを、と思ひて、脇息におしかかりて、書きけることは、(中175-14)

(47) 「さて鷹飼でははいかがしたまはむずる」と言ひたれば、やをら立ち走りて、し据ゑたる鷹を握り放ちつ。見る人も涙せきあへず、まして、日暮らしがたし。ここちにおぼゆるやう、

道綱母▽ あらそへば思ひにわぶるあまぐもにまづそる鷹ぞ悲しかりける
とぞ。日暮るるほどに、文見えたり。(中202-10)

(48) また人の文どもあるを見れば、「さてのみやはあらむとする。日の経るままにいまじくなむ思ひやる」など、さまざまにとひたり。またの日、返りごとす。「さてのみやは」とある人のもとに、「かくてのみとしも思ひたまへねど、ながむるほどになむ、はかなくて過ぎつつ、日数ぞつもりにける。

道綱母▽ かけてだに思ひやはせし山深くいりあひの鐘に音をそへむとは
またの日、返りごとあり。(中241-15)

(49) 親族▽ 「世の中の世の中ならば夏草のしげき山辺もたづねざらまし
ものを、かくておはしますを見たまへおきてまかり帰ることと、と思うたまへしに
は、目もみなくれまどひてなむ。あが君、深くもの思し乱るべかめるかな。

親族▽ 世の中は思ひのほかになるたきの深き山路を誰知らせけむ」(中245-14)

(50) 兼忠女▽ おぼつかなわれにもあらぬ草枕まだこそ知らねかかる旅寝は
とぞありしを、『旅かさなりたるぞあやしき』などもろともにも笑ひてき。後々し

帰りたまひね」など、けしからぬほどに言ふ。(一 248-3)

(40) 如月の十日、宵のほどに、その気色出で来たれば、御所ざまも御心むつかしき折から、私もかかる思ひのほどなれば、よろづ栄えなき折なれど、隆顕の大納言取り沙汰して、とかく言ひさわぐ。(一 251-4)

3.3 「物思ひ」「思ひ腹」

『とはずがたり』において、「物思ひ」7例、「思ひ腹」1例が使用されている。「物思ひ」は、いずれも地の文に用いられ、「思い悩むこと」の意である^③。「思ひ腹」は、『対照』『日本国語大辞典』第2版、『角川古語大辞典』『時代別国語大辞典 室町編』に立項されていない。「思ひ腹」は『とはずがたり』において用いられた特異な語であるのかもしれない^④。久保田(1999)『とはずがたり』、福田(1978)、次田(1987)の訳では、すべて「妾腹」となっている。

(41) 將軍にて下りたまひしかども、ただ人にてはおはしまさで、中務の親王と申しはべりしぞかし。その御跡なれば、申すにや及ぶ、何となき御思ひ腹など申すこともあれども、藤門執柄の流れよりも出でたまひき。(四 439-3)

3.4 『蜻蛉日記』における「思ひ」

『蜻蛉日記』において、「思ひ」は10例のみ使用されている。10例のうち、和歌における例が8例(42)(43)(44)(45)(47)(48)(49)(50)、地の文における例が2例(46)(51)である。以下、『蜻蛉日記』における「思ひ」の意味・用法についてみる。

和歌8例のうち、(42)(43)(44)(45)(50)の5例が、②恋を表わす意味・用法であり、すべての「思ひ」の「ひ」に「火」が掛けられている。5例うちの(44)(45)は兼家の詠んだ長歌で、1首の中に2回使用されている。

和歌(48)(49)、地の文(51)は、「思ひやはせし」「思ひのほか」とあり、④予想を表わす意味・用法である。

和歌(47)、地の文(46)は、「思ひにわぶる」「思ひあらむにしたがひて」とあり、ともに⑤「願い」の意味・用法である。

(42) かくて、十月になりぬ。ここに物忌なるほどを、心もとなげに言ひつつ、

兼家▽ なげきつつかへす衣の露けきにいと空さへしぐれ添ふらむ

返し、いと古めきたり、

道綱母▽ 思ひあらば干なましものをいかでかはかへす衣の誰も濡らむ(上96-7)

(43) かくありきつつ、絶えずは来れども、心のとくる世なきに、あれまさりつつ、来

思われる。そこで、本稿では、「恨み、憎しみ」という意味分類ではなく、「執念、執着」としたい。ただし、例えば、有明の月の二条に対する執着にも似た愛情は、ここには入れず、②の恋に分類している。③6は、有明の月が亡くなって3回忌を迎える折の二条の言葉で、「思ひ」は有明の月のこの世への余執である。③7③8は二条が後深草院と伏見の御所で会って、疑いを晴らすべく宣誓している場面である。③7は、「思ひを述ぶ」とあり、「思ひ」の意味は分類が難しい。『時代別国語大辞典 室町時代編』の「思ひ」の子見出しに、「思ひを述ぶ」があり、「漢語『述懐』を訓読した言い方。胸の中に鬱積した歎きや恨みなどの情を外へ向って言い表して、気持を楽にする」とある。③7は、後深草院への恋心というよりも、宮中を追われたあとのやりきれない思い、未練、執着にも似た感情と判断し、この意味・用法に入れた。

- ③6 「今はこの世には残る思ひもあるべきにあらねば、三界の家を出でて解脱の門に入れたまへ」と申すに、(三 403-2)
- ③7 御裳濯川の清き流れを尋ね見て、もしまた心を留むる契りあらば、伝へ聞く胎金兩部の教主も、その罰あらたにはべらむ。三笠の山の秋の菊、思ひを述ぶ便りなり。もしまた、奈良坂より南に契りを結び、頼みたる人ありて、春日の社へも参り出でば、四所大明神の擁護に漏れて、空しく三途の八難苦を受けむ。(四 478-6)
- ③8 思はざるほかに別れたてまつりて、いたづらに多くの年月を送り迎ふるにも、御幸・臨幸に参り会ふ折々は、いにしへを思ふ涙も袂をうるほし、叙位・除目を聞く、他の家の繁昌、傍輩の昇進を聞く度に、心を痛ましめずといふことなれば、さやうの妄念静まれば、涙をすすむるもよしなくはべるゆゑ、思ひをもや冷ましはべる。あちこちさまよひはべれば、ある時は僧房に留まり、ある時は男の中に交はる。(四 479-11)

3. 2. 7 ⑦喪に服すること。服喪期間。

最後に喪に服すること、服喪期間の意味・用法である2例を挙げる。③9④0は、二条が父や祖母の喪に服している時期という例である。『日本国語大辞典』第二版に「(物思い、嘆きの意から)喪に服すること。また、その期間」、大野(2011)に、「ある感情を胸の内にたたえた状態を保ち、あるいはその状態に堪えているところから、服喪の意も派生した」との記述がある。

- ③9 「あなわびし。これにては、かかるしどけなきふるまひも、目も耳も恥づかしくおぼゆるうへ、かかる思ひのほどなれば、心清くてこそ仏の行ひもしるきに。御幸などいふは、さる方にいかがはせむ、すさみごとくに心きたなくさへはいかがぞや。

として挙げたほうがよいかもしれない。

- (29) さても、去年出で来たまひし御方、人知れず隆顕の営みぐさにておはせしが、このほど御悩みと聞くも、身の過ちの行く末、はかばかしからじと思ひもあへず、神無月の初めの八日にや、「しぐれの雨の雨そそき、露とともに消え果てたまひぬ」と聞けば、かねて思ひまうけにしことなれども、あへなくあさましき心の内、おろかならむや。(一 260-9)
- (30) 「故大納言が常に申しはべりしことも忘れずおぼしめさるる」など仰せらるるもなつかしきやうにて、のどのどとうち向ひまゐらせたるに、何とやらむ、思ひのほかなることを仰せられ出だして、「仏も心きたなき勤めとやおぼしめすらむと思ふ」とかやうけたまはるも、思はずに不思議なれば、(二 293-6)
- (31) ことさらしめやかに、人なき宵のことなるに、御足など参りて、御殿籠りつつ、「さて、思ひのほかなりつることを聞きつるかな。(三 353-10)
- (32) 何となく過ぎにしを、思ひのほかにむつかしければ、宿願の心ざしありて、しばし籠るべきよしを言ひつつ、帰さには留まりぬ。(四 447-1)

3.2.5 ⑤願ひ。希望。決意。

願ひ、希望、決意を表す用法3例を以下に挙げる。③は、有明の月の二条と交流を持ちたいという願ひ、④は隆顕の大納言の出家の決意、⑤は二条の修行の志である。

- (33) またさりとて同じ心なるらむと思ひつること、みな空し。このうへは文をも遣はし、言葉をも交さむと思ふこと、今生にはこの思ひを断つ。(二 312-11)
- (34) 「今は恩愛の家を出でて、真実の道に思ひ立つに、故大納言の心苦しく申し置きしこと、我さへまたと思ふこそ、思ひの^②絆なれ」など申せば、我もげにいとど、何をかとなごり惜しさも悲しきに、薄き単衣の袂は乾く所なくぞはべりける。(二 327-3)
- (35) 修行の心ざしも、西行が修行のしき、うらやましくおぼえてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、かやうのいたづらごとをつづけ置きはべるこそ。後の形見とまではおぼえはべらぬ。(五 533-10)

3.2.6 ⑥執念。執着。

「思ひ」という感情には、①のような悲しさ、②のような恋心のほかに、恨みや憎しみといった感情もあるが、『とはずがたり』においては、恨みや憎しみというよりも、かつての宮中での生活、後深草院に対する未練や執着といった感情のほうが強いように

「この有明の子細、おぼつかなく」など御沙汰あり。(三 421-6)

② 遊女▽ 思ひ立つ心は何の色ぞとも富士の煙の末ぞゆかしき

いと思はずに、情ある心地して、

二条▽ 富士の嶺は恋を駿河の山なれば思ひありとぞ煙立つらむ (四 427-1)

3. 2. 3 ③感じ。気持ち。

ここでは、「思ひ」が心情を表すのではなく、「思ひ」の前に、具体的な心情を表す語がきて、「～のような思い・気持ち」となる意味・用法である6例を挙げる。(23)は有明の月、(24)は皆人、(25)(26)(27)は二条、(28)は伏見院の「思ひ」である。

(23) 七歳にて髪を剃り、衣を染めて後、一床にも居、もしは愛念の思ひなど、思ひよりたることなし。(二 313-3)

(24) 皆人、不思議の思ひをなして見まらするに、祝詞の師といふは、神にことさら御むつましく宮仕ふ者なりといふが参りて、取り上げたてまつりて、(四 463-8)

(25) 『『鶉の居る岩の間、鯨の寄る磯なりと、思ふ人だに契りあらば』とこそ、古き言の葉にも言ひ置きたるに、こは何事の身の行く方ぞ。待つとてまた憂き思ひの慰むにもあらず、越え行く山の末にも逢坂もなし』など思ひつづけて、(四 474-1)

(26) そのやがて八月に私の色を着てはべりしなど、数々思ひ出でられて、

二条▽墨染の袖は染むべき色ぞなき思ひは一つ思ひなれども (五 509-8) (再掲)

(27) 折々も昔を偲び、今を恋ふる思ひ、忘れまらせざりしに、今は一筋に「過去聖靈成等正覚」とのみ、寝ても覚めても申さるこそ、宿縁もあはれに我ながらおほえはべりしか。(五 514-4)

(28) 七月の初めには、都へ帰り上りぬ。御果ての日にもなりぬれば、深草の御墓へ参りて、伏見殿の御所へ参りたれば、御仏事始まりたり。石泉の僧正、御導師にて、院の御方の御仏事あり。昔の御手をひるがへして、御自らあそばされける御経といふことを聞きたてまつりしにも、一つ御思ひにやと、かたじけなきことのおほえさせおはしまして、いと悲し。(五 519-13)

3. 2. 4 ④予想。想像。推量

予想、想像、推量の意を表す用法4例について述べる。(30)(31)(32)は、「思ひのほか」の例、(29)は「思ひもあへず」の例である。(31)は後深草院、(29)(30)(32)は二条の「思ひ」である。「思ひもあへず」は『日本国語大辞典第二版』に「思う」の子見出しとして、立ててあり、「考える間もない。思うこともできない」と説明してある。④の用法は、連語

涙に袖を濡らし、本尊に向ひ持経を開く折々もまづ言の葉を偲び、護摩の壇の上には文を置いて持経とし、御灯明の光にはまづこれを開きて心を養ふ。この思ひ忍びがたきによりて、彼の大納言に言ひ合せば見参の便りも心やすくやなど思ふ。(二 312-7)

- (15) いさや、かならずしも、恋し、かなしとまではなけれども、「思はぬ山の峰にだに」といふことなれば、今年はいくらほどなど、思ひ出づる折々は、一目見し夜半の面影を二度偲ぶ心も、などかなからむ。さればまた、会はぬ思ひの片糸は憂き節にもやと、我ながらことわるれば、「何よりもあさましくこそ。またさりぬべき便りもはべらば」など言ひて、これさへ今日は心にかかりつつ、いかが聞きなさむと、悲し。(二 334-9)
- (16) 昔の例にも、かかる思ひは人を分かぬことなり。柿本の僧正、染殿の後の物の怪にて、あまた仏菩薩の力尽くしたまふといへども、つひにはこれに身を捨てたまひにけるにこそ。(三 354-7)
- (17) 染殿の後は志賀寺の聖に、『我をいぎなへ』とも言ひき。この思ひに堪へずして、青き鬼ともなり、望夫石といふ石も、恋ゆゑなれる姿なり。(三 364-5)
- (18) いつよりもこまやかに語らひたまひて、「さても、人の契り逃れがたきことなど、かねて申ししは、聞きしぞかし。その後、『さても、思ひがけぬ立ち聞きをしてはべりし。さだめてはばかりおぼしめすらむとは思へども、命をかけて誓ひてしことなれば、かたみに隔てあるべきことならず。なべて世に漏れむことはうたてあるべき御身なり。忍びがたき御思ひ、前業の感ずる所と思へば、つゆいかにと思ひたてまつることなし。(三 365-12)
- (19) かかる悪縁に遇ひける恨み忍びがたく、三年過ぎ行くに、思ひ絶えなむと思ふ念誦・持経の祈念にも、これよりほかのことはべらで、せめて思ひの余りに、誓ひを發して、願書を彼の人のもとへ送り遣はしなどせしかども、この心なほやまずして、まためぐりあふ小車の憂しと思はぬ身を恨みはべるに、(三 366-11)
- (20) 「わが身が鴛鴦といふ鳥となりて、御身の内へ入ると思ひつるが、かく汗のおびたたしく垂るは、あながちなる思ひに、わが魂や袖の中留まりけむ」など仰せられて、「今日さへいかが」とて立ち出でたまふに、(三 386-16)
- (21) 新院、▽立ち居くるしき世のならひかな

▽憂きことを心一つに忍ぶれば

「と申されさぶらふ心の中の思ひは、我ぞ知りはべる」とて、富小路殿の御所、

▽絶えず涙に有明の月

誰に憂へてか慰むべき」と思へども、申し表すべき言の葉ならねば、つくづくとうけたまはり居たるに、音羽の山の鹿の音は涙をすすめがほに聞こえ、即成院の暁の鐘は明けゆく空を知らせがほなり。(四 476-7)

(9) 宮々わたらせおはしまししかども、みな先立ちまゐらさせおはしまして、ただ御一所わたらせおはしまししかば、かたみの御心ざし、さこそと思ひやりまゐらするもしく見えさせおはしましこそ、数ならぬ身の思ひにも、比べられさせおはします心地しはべりしか。(五 500-15)

(10)(11)(12) 故大納言、「思ふやうありて」とて御素服の中に申し入れしを、「いまだ幼きに、大方の栄えなき色にてあれかし」などまでうけたまはりしに、そのやがて八月に私の色を着てはべりしなど、数々思ひ出でられて、

二条▽ 墨染の袖は染むべき色ぞなき思ひは一つ思ひなれども (五 509-8)

かこつ方なき思ひの慰めにもやとて、天王寺へ参りぬ。釈迦如来、転法輪所など聞くもなつかしくおぼえて、のどかに経をも読みて、しばしは紛る方なくてさぶらはむなど思ひて、一人思ひつづくも悲しきにつけても、女院の御方の御思ひ推しはかりたてまつりて、(五 509-10) (五 509-14)

二条▽ 春着てし霞の袖に秋霧のたち重ねらむ色ぞ悲しき

3. 2. 2 ②恋。いとしさ。いとおしさ。思慕。

ここでは、恋、いとしさ、いとおしさ、思慕を表す意味・用法の10例を挙げる。(13) ②の2例は和歌である。和歌では、「思ひ」に「火」に掛けて用いられることが多い。『とはずがたり』においても、②の二条の歌において、「思ひ」に煙の縁語「火」を掛けて用いている。(13)は後深草院、(14)(16)(18)(19)(20)は有明の月、(15)(21)(22)は二条、(17)は柿本の僧正の「思ひ」である。(15)のみ、娘(二条と雪の曙との間の子)に対する二条の「いとしさ」「いとおしさ」であり、その他は男女の恋愛感情である。(19)に「思ひの余りに」の例が見られる。『時代別国語大辞典 室町時代編一』の「思ひ」の子見出しに「思ひの余りに」があり、その説明として、「連用修飾語に用いられ、歎き・悲しみ・悩みなどが強くなり、胸の中でこらえきれなくなって、何らかの言動に移るさまを表わす」とある。(19)もその用例であるが、「思ひ」の中身は「思慕」であるので、ここに分類する。

(13) あながちに厭はしくおぼえし御文も、今日は待ち見るかひある心地して、御返事、もくろみ過ぎしやらむ。

二条▽ 我ゆゑの思ひならねどさ夜衣なみだの聞けば濡る袖かな (一 209-5)

(14) いかなる魔縁にか、よしなきことゆゑ、今年二年、夜は夜もすがら面影を恋ひて、

3.2.1 ①心配。悩み。悲しみ。

いろいろと心を悩ませること、心配、悲しみの意味・用法である12例を以下に挙げる。「思ひ」に「御」がついた「御思ひ」は(1)(2)に2例見られ、(1)は亀山天皇の、(2)は遊義門院の「思ひ」である。それら以外の10例はすべて、作者二条の「思ひ」である。この意味・用法では、(5)(6)(7)(9)のように「～身の思ひ」という表現が4例見られる。高木(2005)は、八代集以下の歌集で「身にあまる思ひ」が類型表現となっていることを指摘し、鎌倉期以降の作での「身にあまる思ひ」の使用例を、『宝治百首』『嘉元百首』などから挙げ、「いずれも忍ぶ恋が『身』から漏れ出ることを歌ったもの」であると述べている。一方、『とはずがたり』においては、「身にあまる思ひ」という例は見られず、「～身の思ひ」が用いられ、「思ひ」は、すべて「悲しみ」を表す。

- (1) 常は物の怪にわづらひたまへば、またこの度もさにやなど、みな思ひたるに、はや御こときれぬと言ひさわぐを聞くにも、大臣の嘆き、内の御思ひ、身に知られていと悲し。(一 232-10)
- (2) 幼稚にて母におくれ、盛りにて父を失ひしのみならず、今またかかる思ひの袖の涙、かこつ方なきばかりかは。(一 260-14)
- (3) かくしつづ、結願ありぬれば御出でありぬるも、さすが心にかかるこそ、よしなき思ひも数々色添ふ心地しはべれ。(二 301-10)
- (4) とにかくに、さもぞ物思ふ身にてありけると、我ながらいと悲し。

卯月の空の村雨がちなるに、音羽の山の青葉の梢に宿りけるにや、時鳥の初音を今聞き初むるにも、

二条▽ わが袖の涙言問へほととぎすかかる思ひの有明の空(二 333-11)

- (5) からき浮寝の床に浮き沈みたる身の思ひは、よそにも推しはかられぬべきを、安の河原にもあらねばにや、言問ふ方のなきぞ悲しき。(三 421-13)
- (6) 富士の裾、浮鳥が原に行きつづ、高嶺にはなほ雪深く見ゆれば、五月のころだにも鹿の子まだらには残りけるにと、ことわりに見やらるるにも、跡なき身の思ひぞ積もるかひなかりける。煙も今は絶え果てて見えねば、風にも何かなびくべきとおほゆ。(四 429-11)
- (7) しばしかやうの寺にも住まひぬべきかと思へども、心のどかに学問などしてありぬべき身の思ひとも、我ながらおほえねば、ただいつとなき心の闇にさそはれ出でて、また奈良の寺へ行くほどに、春日の正の預祐家といふ者が家に行きぬ。(四 455-16)
- (8) 「かくて世に経る恨みのほかは、何事か思ひはべらむ。その嘆き、この思ひは、

「思ひ」の使用率が高い上位3作品は、『御撰和歌集』0.33%、『古今和歌集』0.25%、『新古今和歌集』0.17%といった和歌集である。『とほすがたり』は、「思ひ」が40例で、使用率は0.13%となり、用例数の上からは和歌集に近い数値であるといえる。しかし、『とほすがたり』において、「思ひ」が和歌によく使用されているというわけではない。「思ひ」が和歌において使用されるのは、40例中、4例にとどまる。

〈表2〉「延べ語数」における「思ふ」の比率

	徒然	平家	宇治	方丈	新古	大鏡	更級	紫	源氏
思ひ	5	40	6	4	29	4	4	1	156
使用率	0.03	0.04	0.01	0.16	0.17	0.01	0.06	0.01	0.08
思ふ	129	479	559	4	206	155	74	64	2,468
使用率	0.75	0.48	1.14	0.16	1.20	0.53	1.02	0.73	1.19
物思ひ		6			3	1		1	67
延語数	17,110	100,091	49,183	2,527	17,165	29,253	7,243	8,736	207,788

	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉	合計
思ひ		10	40	2	25	7	5	27	365
使用率	0.00	0.04	0.33	0.06	0.25	0.10	0.10	0.05	
思ふ	283	444	192	27	163	118	46	578	5,989
使用率	0.86	1.98	1.61	0.77	1.63	1.70	0.90	1.15	
物思ひ	1	6	3		4	1	2		95
延語数	32,904	22,400	11,955	3,496	10,013	6,931	5,119	50,056	581,970

3.2 意味・用法による分類

『とほすがたり』における「思ひ」の意味・用法を次のように7つに分類する。用例数とともに示す。

- | | |
|--------------------|-----|
| ① 心配。悩み。悲しみ。 | 12例 |
| ② 恋。いとしさ。いとおしさ。思慕。 | 10例 |
| ③ 感じ。気持ち。 | 6例 |
| ④ 予想。想像。推量 | 4例 |
| ⑤ 願い。希望。決意。 | 3例 |
| ⑥ 執念。執着。 | 3例 |
| ⑦ 喪に服すること。服喪期間。 | 2例 |

3. 『とはずがたり』における「思ひ」の意味・用法

——『蜻蛉日記』と比較して——

3.1 名詞「思ひ」と動詞「思ふ」の用例数

『とはずがたり』において、「思ひ」は40例、「物思ひ」は7例である。『対照』によると、『蜻蛉』における「思ひ」は10例、「物思ひ」は6例である。次に、動詞「思ふ」の用例数を見る。辻村（1992）によると、『とはずがたり』において、「思ふ」は299例、「物思ふ」は11例見られる。『蜻蛉』における「思ふ」の用例数は、『対照』によると、444例である。『対照』においては、「物思ふ」は「物」と「思ふ」の2語とされているため、「物思ふ」は、「思ふ」の中に含まれる。『とはずがたり』『蜻蛉』の延べ語数は、それぞれ、31,335語^①、22,400語である。『とはずがたり』の数値を〈表1〉にまとめる。

〈表1〉『とはずがたり』における「思ふ」「思ひ」の用例数

	思ふ	物思ふ	計 思ふ	思ひ	物思ひ	延べ語数
『とはずがたり』	299	11	310	40	7	31,335

「思ふ」の用例数を見ると、『蜻蛉』は延べ語数22,400のうち、444例使用されている。『とはずがたり』よりも延べ語数が少ないにも関わらず、『蜻蛉』において、「思ふ」の使用例が多いことが注目される。『対照』別冊の「8 各作品の特徴語上位20語」に、収録17作品における、特徴語の一覧を載せているが、『蜻蛉』の特徴語の6位が「思ふ」である。他の作品の上位20語に「思ふ」は入っておらず、『蜻蛉』において、「思ふ」は特徴的な語であることがわかる。しかし、名詞「思ひ」は10例のみの使用である。

「思ひ」の使用例が少ないのは、『蜻蛉』だけの特徴かどうかを見るために、『対照』から「思ふ」「思ひ」「物思ひ」の用例数を抜き出す。「思ひ」「思ふ」の下段、「使用率」は各作品の「思ひ」「思ふ」の出現頻度を作品ごとの延べ語数を分母として百分率で算出したものである。〈表2〉を見ると、『蜻蛉』における「思ふ」の使用率は1.98%で17作品中、最も多いが、「思ひ」は0.04%である。これは、『枕草子』0.00%、『紫式部日記』0.01%、『宇治拾遺物語』0.01%、『大鏡』0.01%、『徒然草』0.03%、『平家物語』0.04%につづき、7番目に低い数値となっている。

つまり、「思ふ」は『蜻蛉』において444例も使用される特徴語であるが、「思ひ」の使用例は10例（0.04%）と少ない。しかし、「思ひ」の使用率が低いのは『蜻蛉』のみの特徴ではなく、『枕草子』、『紫式部日記』、『宇治拾遺物語』、『大鏡』、『徒然草』、『平家物語』においても同様であると言える。

『とほずがたり』における「思ひ」の意味・用法

——『蜻蛉日記』と比較して——

入 江 さ や か

1. はじめに

本稿は、鎌倉時代成立の『とほずがたり』における「思ひ」の意味・用法について、分類、記述をし、その意味・用法ごとに用例を挙げることを目的とする。『とほずがたり』は、『源氏物語』の影響を強く受けた作品であるが、その『源氏物語』に影響を与えたとされるのが、同じ女流日記文学である『蜻蛉日記』である。平安時代成立の『蜻蛉日記』における「思ひ」の意味・用法についても触れる。

2. 研究方法

調査資料は、久保田淳校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とほずがたり』（以下、『とほずがたり』と称する）とする。辻村敏樹編（1992）『とほずがたり総索引』【自立語篇】も適宜、参照する。『蜻蛉日記』は、『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』の本文を引用し、語の用例数は、宮島・鈴木・石井・安部（2014）『日本古典対照分類語彙表』の数値を使用する。（以下、『蜻蛉』『対照』と称する。）

『とほずがたり』に用いられている「思ひ」の用例をすべて抜き出し、意味・用法の分類、記述を行う。用例を記す際は、『とほずがたり』の本文で「思ひ」が用いられている箇所を抜き出し、（巻、頁数-行）の順で記す。（一 232-10）は巻一 232頁、10行目ということである。用例中の▽は、和歌であることを示す。『蜻蛉』も同様にして、用例を記す。

本稿では、『とほずがたり』における名詞「思ひ」40例を調査対象とする。辻村（1992）では、「一つ御思ひ」を「思ひ」と別の見出し語として立てているが、本稿では、「一つ」と「御思ひ」の2語に分け、後項の「御思ひ」を調査対象とする。「物思ひ」7例、「思ひ腹」1例についても述べる。